

W
OMEN'S



NEWS

2008 NOV.

S
PORTS

VOL.47

F
OUNDATION



バドミントンを人気スポーツにした功労者
オグシオこと小椋久美子選手と（左）と潮田玲子選手
（北京オリンピック：フォート・キシモト）

J
APAN

Message 女性アスリートの生き方 ミツ谷洋子.....	2
インタビュー 「女性の数を増やすことより 人材を揃える方が大事だと思います」 日本バレーボール協会執行役員 荒木田裕子さん.....	3
Women's Sports 半世紀前 私の“キッズじゅうどう” 榊井美佐子...	6
Column アメリカの風「女性スポーツ便り」第2回 羽石架苗.....	7
TIME TRAVEL 「スポーツ」「社会」	8
事務局便り.....	9

女性アスリートの生き方

近年、日本の女性の生き方には、大きな変化が見られます。この夏の北京五輪では、「ママでも金」と宣言していた柔道のヤワラちゃんこと谷亮子選手以外にも、ママさん選手が活躍しました。

クレ射撃の中山由起枝選手は、シドニー五輪後に引退し、結婚・出産の後、離婚しました。一人娘に自分が輝いている姿を見せたいと、現役復帰しました。また、陸上1万の赤羽有紀子選手は、結婚後の引退を考えたそうですが、夫にコーチとして支えてもらい、現役を継続することにしました。ビーチバレーの佐伯美香選手は、夫の勧めで出産して半年でコートに戻りました。

結婚しても、出産しても、スポーツの世界で自分の夢を追いつづける女性アスリートの姿は、以前はほとんど見られませんでした。女子選手にとっては、スポーツとは結婚したらやめるもの、出産後に子どもを置いてスポーツをするなんて……というのが、世間一般の常識として考えられていたからです。

変わる女性の職業意識

女性の労働力率について、日本の特徴といわれているのが、20歳代で上昇するものの30歳代で落ち込み、40歳代でまた上昇するという「M字型カーブ」です。30歳代の落ち込みは、子どもの育児期に当たります。欧米では30歳代で比率が下がることはありません。日本では結婚や出産で仕事をやめ、子育てが一段落したところで、再就職する女性が多いのです。労働力率は高くなっているものの、昭和40年代からのこの傾向は、あまり変わっていません。

一方、女性が職業を持つことに対する意識

は、大きく変わりました。男女共同参画白書（平成18年度版）には、女性の職業に対する意識について、こんなアンケート結果が出ています。1位は「子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい」（41.9%）、2位が「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい」（37.0%）。

興味深いことに、2年前の同じ調査では、1位と2位の順位が逆でした。つまり、この2年間に、職業の継続を支持する人の比率が、職業を中断して再就職することを支持する人の比率を追い抜いたということで、統計的には仕事と家庭に関する女性の意識が、逆転したことを示しています。

社会を映す女性とスポーツの関係

男性と女性のスポーツの関わり方は、社会的に見て大きな違いがあります。女性とスポーツの関係は、女性の社会進出の度合いに比例しています。そんな社会の一面を物語っているのが、女性アスリートの活躍です。

今や、女性がスポーツでガンバル姿に、「嫁にいけなくなるぞ」という声を聞くことは、ほとんどありません。それどころか、妻のアスリート生活を支えるために仕事を辞め、主夫として“内助”に徹する男性も現れました。

前述の赤羽選手の夫もその一人です。そこには、“男の沽券”などという言葉はなく、アスリートとしての妻を、コーチとして支えるという、純粋な気持ちがあるだけです。

男性スポーツの最後の砦であったボクシングにも女性が進出し、日本ボクシングコミッション（JBC）は今年2月からプロテストを開始しました。毎月のテストに挑戦する女性の姿は、現代社会に挑戦する女性の姿です。

インタビュー

女性の数を増やすことより 人材をそろえる方が大事だと思います

日本バレーボール協会執行役員 あらきだゆうこ 荒木田裕子さん

モントリオールオリンピック女子バレーボール金メダリストの荒木田裕子さんは、北京オリンピックで唯一の女性本部役員として日本選手団を陰で支えました。日頃はバレーに軸足を置きながら、世界を舞台に様々な活動をされています。（インタビュー：9月17日、東京・千駄ヶ谷の日本バレーボール協会） 聞き手：ミツ谷洋子



OCAシェーク・アーマド会長と（2007年OCA総会で）

●北京オリンピックで本部役員

— 北京では日本選手団の本部役員として“フル稼働”されたようですね。

荒木田 プレスアタッシュとして選手の記者会見をセッティングしたり、進行役もしました。それから選手団広報としては、バレーやソフトボール、バドミントン、テニスなどの球技や女子スポーツを担当しました。

— オリンピックではシドニー大会以来、本部役員は10人か11人で、女性役員はずっと1人のままです。少ないと思いませんか。

荒木田 数ではなく、誰が何をすることが重要だと思います。本部役員は、以前はJOC（日本オリンピック委員会）の役員に対するご褒美的なものだったのですが、福田強化本部長の方針でそのような考え方はなくなりました。

— さすが実行力のある福田さんですね。アテネまでは、女性役員はシンクロの金子正子さん（今

大会シンクロナイズドスイミングコーチ）でした。**荒木田** 私は、一昨年のドーハ・アジア大会から本部役員として参加しています。今回は、その時とほとんど同じメンバーです。

— まさに、選手団を支えるプロジェクトチームということですね。

荒木田 とにかく大変でした。夜の10時45分に始まる試合もあり、記者会見を終えて選手村に戻るのが午前1時半。翌朝8時にミーティングがあり、睡眠時間は平均4時間くらいでした。

— キツイ日々ですね。かつては選手として、今回は役員としてオリンピックに参加されたわけですが、どんな感想を持たれましたか。

荒木田 卓球の（福原）愛ちゃんは、立派でした。負けてもさわやかな表情で、次々に中国のメディアに中国語できちんと答えていました。

私は、そういう選手たちと一緒にいるのが好きなんです。アスリートの感動や悔しさを身近に見

て、「何かしてあげられることはないか」と考えながら仕事をしていました。

— モントリオール大会から実に 32 年ぶり。

荒木田 時代が変わりましたね。私たちの頃は、選手村でも男女の棟が違いました。同じ日本選手団といっても、口をきかないことが普通で、仲良くやろうとも思いませんでした。

— 今はどうなんですか。

荒木田 「チームジャパンのために一緒に頑張ろう」という意識が強くなります。NTC(ナショナルトレーニングセンター)で、各競技が集中的に合宿するようになってからだと思います。選手村では、選手同士が挨拶するように徹底しました。壁に試合の予定やメダル獲得者の名前が貼り出されるんです。

— それがキッカケで、選手同士が声をかけたり、共通の話題ができますね。

荒木田 選手たちは気軽に携帯の番号を交換したりして、仲良くやっています。4年に1回つくられるチームではなく、「チームジャパン」として継続しているという意識があります。

— 今までの日本選手団にはなかったことです。オリンピックは、そのような継続性のある取組が大切ですね。



「私の選手時代とは変わりました」と荒木田さん
(撮影：高橋昭子)

●まずは女性の人材をそろえること

— 北京では、久しぶりにバレーボールが男女アベック出場でしたが、残念な結果でした。(女

子：5位、男子：予選負け)

荒木田 以前は、オリンピックに出場するために、日本のバレー界は一丸となって必死にやっていました。最近は長くオリンピックに出ていないせいか、自分たちの問題としての危機感がありません。

全体的に、日の丸のチームは自分たちとは関係ないと考えているようで、とても寂しいですね。日本のバレーはもっと外に目を向けなければならぬと思います。

— ところで、荒木田さんは今年 6 月に JOC 理事となられたわけですが、スポーツ界での女性の問題については、どんな取組をされていますか。

荒木田 「女性スポーツ専門委員会」で女子選手を対象にアンケートを取ったのですが、最近の女子選手は、医師やトレーナーについて、特に性別についての希望はなく、男女の違いをほとんど気にしていません。環境的にも男女に差がなくなってきているということだと思います。

— あまり問題がないということですか。

荒木田 性別を超越しているのだと思います。ただ、多感なジュニアやジュニアユースになると、話は別です。バレー協会では、女子のジュニアユースの遠征には、医師かトレーナーのどちらか 1 人は女性を入れるようにしてきました。2010 年には 14~18 歳が対象のジュニアオリンピックがあります。この時は、日本選手団として、女子チームにはきちんと対応する必要があると思います。

— 若い世代の選手たちには、そのような対応が重要ということですね。

荒木田 女性の問題についてよく考えてみるのですが、ブライトン宣言で女性役員の積極的登用を謳っていますが、私は「女性の人数を増やす」というより、まず「女性の人材をそろえること」が大事だと思います。

— バレーボール協会では、現在、執行役員をされていますね。女性の委員会を作られたとか。

荒木田 今年の春、役員会で提案したらすぐにやりなさい、ということで、「女性アスリート小委員会」を作りました。吉原(知子：アテネ五輪全日本女子キャプテン)や、廣(紀江：ロサンゼ

ス五輪銅メダリスト)にも入ってもらいました。

— どんな活動をしているのですか。

荒木田 引退した女子選手への情報提供。それから、スポーツ好きの女医さんに登録してもらって、国際大会に出場する女子チームには、そこから医師を派遣する仕組みを作ろうと考えています。

— 素晴らしい計画ですね。WSF ジャパンには、女性スポーツ医学研究会の方がいらっしゃるので、お声をかけていただいてもいいですね。

●アスリートのために

— 荒木田さんとはとにかく積極的で頼もしいですね。他に OCA (アジアオリンピック評議会) 理事もされていますね。

荒木田 アスリート委員長をしています。

— アジアは宗教や人種も多様ですから、難しい部分があるのではないのでしょうか。

荒木田 45 の NOC (国内オリンピック委員会) があって、様々な環境の中で、アスリートたちはがんばっています。

中国では、機械のように練習して、ダメだとわかるとポイ捨てという状況だったりして、日本は恵まれていますよね。

— 具体的にはどんな活動をされているのですか。

荒木田 「アスリートはどう生きるか」を考えてもらうキッカケとして、先人がどう生きているかをまとめた DVD を、全 NOC に送りました。

— どんな内容ですか。

荒木田 4 人のアスリートを取り上げました。室伏(幸治)君がナビゲーターです。サントリーにいたバレーの大浦(正文)君は、大学の夜学に通い、今はユースの監督です。水泳の衣笠(竜也)君はトレーダー。女子陸上 5 千メートルの志水(見千子)さんは、コーヒーショップを経営しながら、ジョギング教室を開いています。

— 皆、それぞれ頑張っているんですね。

荒木田 10 月 18 日にバリで開催される「アジア・ビーチゲームズ」でこの映像を流したり、ドーピングの相談に乗ることも考えています。

— やりがいのあるお仕事ですね。

荒木田 私は日本バレーボール協会(国際事業



OCA アスリート委員会ミーティング(中央)
(2008 年 10 月バリのアジア・ビーチゲームズ大会)

本部副本部長として) 仕事をしているのですが、オリンピックや ANOC (各国オリンピック委員会連合) の会議などにも行かせてもらい、世界がどんどん広がってきました。こんなに楽しい仕事はありません。

— 「仕事楽しい」といえる人は幸せですね。キャリアを存分に活かして活躍されている様子うかがい、私も嬉しくなりました。機会があれば、また、お話を聞かせてください。

インタビューを終えて：荒木田さんに最初にお会いしたのは私が新米記者の時で、荒木田さんはまだ高校生。「春の高校バレー」秋田代表・角館南高校のエースでした。その後、日立や全日本チームでは、地味ながら堅実なオールラウンドプレーヤーとして活躍されました。そんな姿勢が、今の仕事ぶりに表れているように思います。日本を代表する女性アスリートのロールモデルとして、アジアを牽引するリーダーとして、今後も活躍を期待しています。

<荒木田裕子さん:略歴> 秋田県立角館南高校卒業後、日立製作所入社。全日本女子チーム選手としてメキシコ世界選手権、モントリオール五輪、ワールドカップで 3 つの金メダル獲得。日本女性として初めて国際公認コーチの資格取得。スイス、旧西ドイツにてナショナルチーム、クラブチーム指導。ロンドンに移り英語を学ぶ。(財)日本バレーボール協会執行役員、JOC 理事、OCA 理事等として活躍。1954 年、秋田県生まれ。WSF ジャパン会員。

Women's Sports

半世紀前の私の“キッズじゅうどう”

榎井美佐子

機関紙 46 号の「キッズじゅうどう」の記事が目に入り、52 年前、8 歳で少年柔道大会に出た頃の事を懐かしく思い出しました。

●恥ずかしさを隠して男の子と柔道練習

私の父は学生時代に柔道部に所属し、講道館 5 段で、月に数回、神田の万世橋警察署の道場で柔道を教えていました。一人子だった私も道場に連れて行かれたのですが、当時は柔道をする女の子なんていないし、内心とても恥ずかしく、悲しいくらいに嫌でした。

しかし、大好きな父の誘いを拒めず、一生懸命、恥ずかしさをこらえ、男の子に交じって練習に励みました。と言っても私と練習をしてくれる男の子はなかなかいませんでした。女の子と組むことに抵抗があったのでしよう。



紅一点で出場した少年大会の様子を伝える警察消防体育新聞 (昭和 30 年 8 月 25 日)

父は慶応大学の柔道部 OB として、毎年、大学の寒稽古にも参加していました。私にとっても思い出の一つです。夜が明ける前の寒い朝、おばあちゃんが作ってくれた温かい磯辺餅を持って、一番電車に乗るのです。田町駅から三田綱町の道場までは子どもの足では結構な距離でしたが、手を引かれながら父の早足に付いていったものです。

慶大柔道部は歴史もあり、現役からかなり年配の OB まで大勢が集まり、暖房もないのに道場はいつも湯気が立つほどの熱気でした。そして唯一の楽しみは、最終日に出るお汁粉でした。

いつまで柔道衣を着ていたかは忘れましたが、

体の成長と共に恥ずかしさが増し、母のアドバイスもあり止めました。柔道衣の下に着る女性のための肌着などない頃です。恥ずかしさが常にあったのですが、いつも堂々と振舞って、写真には男の子以上に男らしく写っているのが印象的です。



千代田区立芳林小学校校庭で (前列左端=昭和 32 年)

時間とともに、周りの男の子たちは私を仲間として受け入れ接してくれました。小学校で私に付いたあだ名は、「南極探検隊」でした。日本初の南極観測隊が南極に向かうというので話題になっていた時期だったのです。嬉しくもないあだ名でしたが、前を向いてやり過ごしていました。

●受身を小学校の授業に

私の柔道は楽しい思い出とは言えませんが、転び方が上手くなったのは一番の収穫でした。うっかり階段から落ちることが多かったのですが、受身のお陰でいつも事なきを得ています。

最近では男女を問わず柔道ができる環境になっていますが、一スポーツとしての柔道を超え、小学生の時期に全員が受身を身につけておけば、怪我の予防になると常々考えています。柔道の受身が必修科目になれば良いとも願っています。

【ますい・ふさこ】慶大時代は学生ゴルファーとして日本女子学生選手権等に優勝。1974 年プロ入り。社団法人日本女子プロゴルフ協会元理事、飯能ゴルフクラブ理事。筑波大学でコーチ学を専攻し修士課程修了。WSF ジャパン会員。

アメリカの風「女性スポーツ便り」第 2 回

スポーツを通して多くを学んだ夏

羽石 架苗

米国女子サッカーが五輪金メダル

北京オリンピックは、こちらでも女性アスリートの活躍がメディアで大きく取り上げられました。中でも、最も注目されたのが、41 歳にして 5 度目のオリンピック出場を果たし、しかも銀メダルを 3 つも獲得したダラ・トーレス。女性アスリートの引退年齢が比較的早い日本人にとって、情熱と努力があれば女性であっても限りなくチャレンジできるということを証明してくれた出来事だったのではないのでしょうか。

そして、なんとと言ってもアメリカ女子サッカー代表チームの金メダル獲得。大会直前、エースのアビー・ワンバックを怪我で失い、国中が「今回の女子サッカー代表は勝てない」ムードの中、やってくれました！ チャンピオンというプライドを捨てず、最後まで勝利を信じ続けた末の大勝利でした。多くの方がスポーツの大事な基本を今回の代表から学びました。

欧米男性監督に勝つ楽しさ

秋の新学期が始まり、大学サッカーもメインシーズン入り。マントホリヨーク大学サッカーチーム監督としての 2 年目、チームとしては数年ぶりにプレーオフ出場を決めました。最後は準々決勝を PK で負けてしまったのですが、まずまずのシーズンを送ることができました。1 年目は監督として自信が持てず、それが選手たちに伝わり、うまくコミュニケーションが取れない時もありました。今年は、去年の反省から、とにかく直球で正直なコミュニケーションを心がけ、22 人の選手一人ひとりという関係を築くことができました。

試合中のコーチングという面でも、少しずつ仕事ができるようになって来ました (笑)。女子サッカーのとても盛んなこの国でも、コーチにはまだまだ男性が多く、女性でしかもアジア人である私は、時々、壁にぶつかります。でも、アジア人の女性はコーチングができないという先入観を

サプライズで崩すこともなかなか楽しく、前向きにやっています。例えば、典型的な欧米の男性監督は、試合中に審判に文句を言ったり、大きな声で選手たちに怒鳴ったり、とにかく試合中ずっと騒がしく、試合を支配することが多いのです。

しかし、私は、自分のチームの選手たちが相手の監督に飲み込まれないように、ポジティブなコーチングを続けるように心がけ、冷静に試合を分析しチーム戦術を変えるように努力しました。そして、予想外の勝利を手にしたときは、言葉にできないほどの嬉しさです。

インドネシアで女性スポーツのために活動

アメリカ政府の文化交流機関と民間のグループによる女性・少女スポーツ発展プロジェクトの一環として、夏の終わりに 11 日間、インドネシアに派遣されました。地方の 3 カ所で、少女と身体障害者のためのスポーツ教室を行い、女性スポーツについて講演をし、政府関係者やアメリカ大使館を訪ねました。

インドネシアはイスラム教徒が多く、女性がスポーツに関わることへの障害は想像以上に高いものでした。とても貴重な経験であったばかりでなく、今ある自分の環境がいかに幸せであるかを身にしみて感じた旅でした。



【はねいし・かなえ】日本女子サッカーリーグ (ジェフ市原) でプレーした後、米国にサッカー留学し全米優勝を果たす。セミプロチーム (ニューヨークマジック) では現在キャプテン。名門女子大マントホリヨ

ーク大学サッカーチーム監督の傍ら授業も担当。コーチ学・体育教育学専攻 (Sport Pedagogy) 博士号取得を目指している。WSF ジャパン会員。1978 年生まれ。